

International Culture Appreciation & Interchange Society, Inc.



一般社団法人

海外と文化を交流する会

(一社) 海外と文化を交流する会 会報

2017年10月発行 第63号



1938年、ロックフェラーセンターにて開催された国際新教育会議にて
 汎太平洋新教育協会の日本代表として約600人の教育者の前でスピーチ (写真：N.Y. TIMES)

- 目次 ★「チャリティーコンサート」開催のご報告と寄せられた感想 (P2)
- ★「松岡朝物語」(仮称) 第8回 (P6)・第9回 (P14)

チャリティーコンサート開催のご報告と寄せられた感想

2017年チャリティーコンサート「箏とハーブ～東洋と西洋の響きの出会い」を鑑賞して

2017年9月29日

海外と文化を交流する会 理事 霧生敦史

会場は霊南坂教会、ここは毎年恒例である。山口百恵と三浦友和が結婚式を挙げた教会として有名だ（以前知らないと言ったら妻に叱られたくらい）。教会だけに静かで厳かな雰囲気は自然と包まれる。パイプオルガンで始まりクリスマス曲でしめたのは、この雰囲気を曲目にも反映させた、企画側の粋な取り計らいを感じてもらえただろうか。

当会ではその設立趣旨からオーストラリア、ニュージーランドを含むオセアニア地域との文化交流を目的に活動してきた。その交流の原点を顧みる意味において、オーストラリア出身の箏（こと）奏者であるマクイーン時田深山さんとハーブ奏者の有馬律子さんをお招きした。ちなみに箏は「こと」や「そう」と読むが、ハーブとともに分類として「琴」の一種である。この組み合わせは実に絶妙であって、どちらも「琴」に属する楽器を操るが、マクイーンさんが和楽器の箏、有馬さんが洋楽器のハーブなのだ。それをパイプオルガンと弦楽四重奏で支えるという構成なのである。

ここ数年来の演者、テノール歌手の大澤一彰氏から趣向を変えて、今回は箏とハーブと弦楽となり、会場の埋まり具合を大変気にしていた。開場直後の客足はパラパラと、このままでは半分も埋まらないのかと一時は落胆しかけたが、意外にもコンスタントに客足が続き、開演直前には満席に近くなり、主催スタッフとしては安堵した。

全体の構成は、パイプオルガンからハーブ+弦楽、続いて箏+弦楽、ラストは豪華盛大にハーブ+箏+弦楽である。ラストのメドレーは日本の四季をテーマにした春夏秋とクリスマス曲。各構成のそれぞれの前半部分に、曲名は分からないけど聞き覚えのある曲をたくさん持ってきてくれたので、楽しく気楽に入っていくことができた。

ハーブであれば、西洋弦楽器と合わせて聞くことも多いので、この趣向を聞かされた当初から違和感は無かったが、箏がこれらの弦楽器にどう調和していくのか実に興味深い想いでいた。想いは実に良いほうに裏切られた。洋楽器だけで構成されるオーケストレーション（ここでは弦楽合奏という意味）に新たな音色が加わってバリエーションが増えたというだけでなく、従来のオーケストレーションの邪魔をしない（違和感のない）音も箏が出し、完全な調和となっていた。これは面白い、新たな発見だった。

また、今回同じ「琴」仲間である箏とハーブが同時にステージに上がるのでかなり集中力を高めて聴き比べをすることもできた。

プログラムではハーブが先行した。各種の演奏会などで時折共演するので割となじみがある感じ。弦楽四重奏との調和はすばらしく、安心感がある。

ハーブの音は純音に近い、のびやかであり、つやがある。誰しもが脳の奥に刷り込まれているイメージのせいもあるが、「天にも昇る気持ち」を音で表すのに適している。

プログラムの途中で演者の有馬さんがトークでハーブにまつわるトリビアを教えてくれた。

ハーブは洋楽器の中で最も古い歴史を持つ。最初は弓に張った弦を弾いたことからだそうだ。弦が47本もあり、それだけでも広大な音域を備えるが、さらに足元にペダルが「7つ」も付いていて半音

上げたり下げたりできるようになっているとか。床置きになっているので一見支えるのが楽そうに見えるが、この7つのペダルを足で操作するために相当重い本体を肩で支えなければならず大変疲れるという話。終演後に語ってくれたと人づてに聞いた。

一方の箏である。日本の楽器にもかかわらず、正月のデパートでかかるくらいしか普段は聞かないし、お祭りでも歌舞伎音楽でも箏の出番はないほど意外となじみが薄い。

これも意外であったが、和装ではなく洋装、正座ではなく椅子に座っての演奏様式（後でネット検索したら、近年では珍しくないらしい）であった。

低音域が広い17弦のものと、通常の13弦のものも合わせて2台（「2面」と数えるらしい）がステージにあった。

箏はなぜか「日本の音」を感じさせる。それは何なのか、なぜなのか。集中して聴いてみた。減衰の利いた（長時間響かない）音、高音域が抑制された音、ちょっとノイズの混じった音……洞窟の中から湧き出るような音、水の滴が水面を打つ音。同じ和楽器・弦楽器でも三味線はそのような音はしない。

「風」がテーマの曲目が2つ。「風」をイメージして目を閉じれば尺八の音色も「風」だと気づいた。どちらも和楽器で風に含まれる微妙な「ノイズ」が共通する。なるほど「和」とは自然の中にある。

演奏中に「琴柱（ことじ）」を頻繁に動かす。生演奏を見たのが初めてだったから、そんな奏法があったのかと驚いた。

アンコール曲での演奏は技巧を凝らしていた。おそらくは非常に速いピッチでかき鳴らすため連続音として聞こえる。高音が連続音として聞こえると全く違う澄んだ音色に変わる。低音はエレクトリックベースにも似た音、奏法がそうさせるのか。実は自分の見ている席からは譜面台で隠れて手元が見えず、悔しい思いをした。

こうしてリアルタイムに比較してみると、ハープが「澄んだ空気」に対して箏は「風」である。ハープが「人間の理想」に対して箏は「自然界にあるそのもの」である。西洋と東洋のそれぞれが根ざすものがよく現われている。

今回のコンサートは約2時間があつという間に過ぎるほど純粋に楽しただけでなく、これらの交流を実体験したという意味においても実に有意義だったと思う。今後もこのような交流をテーマにしたコンサートを企画していけたらと思う。また、このコンサートは国際的な文化交流と、なおも復興中の福島の子どもの支援するためのチャリティーでもある。終演後にも多くのお客様からの募金をいただいた。心から感謝したい。

素晴らしい演奏会

眞野眞理子

何もかも素晴らしかったです。こんなに感動できる自分に、驚いています。1曲、1曲聴きながら、これは、神様のご褒美だと、何度も何度も思い、涙が出ました。私は以前、琴を習ってまして、女子美術大学では、箏曲部でした。顧問の先生が、17弦を弾かれてましたので、懐かしく、久しぶりに琴を弾きたくなりました。帰りに友人と演奏会の素晴らしさを、深いところまでお話しできたのも、喜びでした。友人の感性も素晴らしいです。あれだけの演奏会を企画して、準備するのは大変と思います。ありがとうございました。

角谷 昌子

日本の横置き演奏琴と西洋の縦演奏のハープの思わぬ融合に、新しい驚きと印象的な音色を感じました。楽器の説明、歴史も学べ大変良い機会だったと思いました。聞覚えのある曲は、琴、ハープの音色が良く楽しめました。

向後佐恭子

29日は良い音楽会で大変楽しゅうございました。箏と洋楽器のコラボは初めての体験でしたが、それぞれの奏者が名手ばかりで、とても聴き応えのあるものでした。これほどの音楽会を開くにあたって、担当者ほどのお忙しくお過ごしでしたでしょうと、想像いたしました。

下村トシ子

「箏とハープのコラボレーション演奏に心が温かくなった」「初めて経験する感激」「弦楽四重奏の神聖さに胸が熱くなった」「来年もお声をかけてね」と、来てくれた多くの友人達から次々と、私も嬉しくなってくるような、お電話をいただいております。





松岡朝物語(仮称) 第8回

(前回のナンバリングで31が重複しておりました。つきましては、今回は36からはじまります。)

第8回 波紋——アメリカ行脚 (後編)

文/角山祥道

36

松岡朝のアメリカ行脚は、友人を増やす旅でもあった。

ひとりでも理解者を増やす。それがどんなに途方もないことか、朝ははっきりと認識していた。国が抱える大きな問題は、ひとりの人間の手に余る。かといって手をこまねているわけにはいかない。

朝は招きに応じて、どこにでも行った。試しに数えてみると、3カ月間で150回の講演をこなしていた。時間は足りず、スケジュールリングもままならない。朝には、手助けしてくれる人間が必要だった。

その時、朝の頭に浮かんでいたのは、かつて論文の執筆を手伝ってくれたロイス嬢だった。朝はコロンビア大学に行き、ロイス嬢のことを尋ねたが、「わからない」とのことだった。バーナード大学でもそれは同じだった。大学での調査の途中で、かつての指導教官のリンゼイ教授とすれ違った。藁にもすがる思いで、ロイス嬢のことを尋ねると、ニューヨーク5番街の長老派教会のことを教えてくれた。リンゼイ教授いわく、ロイス嬢は長老派教会の布教をしていたことがあるのだそうだ。

朝は長老派教会に向かった。

事務室に赴き、こちらに背中を向けて座っていた、タイプライターを打っている女性に声をかけた。「こちらにミス・ロイスはいらっしゃいますか？」

その女性は振り向くと、飛び上がって叫んだ。

「朝！ ここで何しているの？」

アメリカは巨大な国だ。中でも大都市ニューヨークは、人が溢れる大海のようなものだ。あてもなく知人を捜すのは、大海の中から1匹の魚を探すに等しい。でも、信じる気持ちさえあれば、会いたかった人と会えるのだ！

朝は約1年間、アメリカ中を講演して歩いたが、ロイス嬢は以後、アメリカ行脚の良きパートナーとなってくれた。

朝を勇気づけてくれた旧友はロイス嬢だけではない。

ある講演には、かつてノースウェスタン大学の学生時代にお世話になったシカゴのハーディング夫人が尋ねて来てくれた。

「新聞に、講演のお知らせが載っていました。運転手が『以前家にお連れした日本のお嬢さんと同じ方だろうか』と聞くのですよ。18年も前のことですし、本当に私の知る朝なのか確認はありませんでした。それでこの目で確かめに来たのです」

朝には、不完全な英語しか話せなかった記憶が蘇った。それなのに、運転手が覚えてくれていようとは！

フィラデルフィアのヨーコム夫人もそうだ。ヨーコム家には当時、8歳のスタンレーと6歳のヘンリーという2人の男の子がいた。ハロウィンのパーティで、ゴブリン(精霊)の格好をしたスタンレー、海賊の格好をして銃を突きつけてきたヘンリー。朝にとっての大切な思い出だ。

朝は理解者を増やすべく、ヨーコム家を訪ねた。

「朝！ あなたここで何をしているの？ 今アメリカでは、日本人に対しての反感がひどくなっているのを知らないの？」

朝は、涙を押しとどめることができなかった。

朝はその足で、ディーン博士の家を訪ねた。

気の置けない友人との夕食会だったが、ディーン夫人も博士の妹のミス・ハリエット・ディーンも、3人ともほとんど話をしなかった。おそらく皆、同じことを考えていたのだ。ディーン博士の椅子はいつも通りの場所にあったが、空っぽで誰も座ってはいなかった。

ミス・ハリエットが沈黙を破った。

「あなたのお国で何が起ころうと、朝、私たちはいつもあなたの友達だということを、絶対に忘れないでね」

ディーン夫人があとを受けた。

「私たちは、なぜあなたがはるばる遠くからここへいらしたのか、よくわかっていますよ。アメリカにいる友人たちといろいろなことを話し合いたいのでしょう。今、私はあなたに大勢の人にあなたを紹介できる立場にいますけど、でもたとえ私がレセプションを開いても、私の友人は一人も来ないでしょう。多くのアメリカ人にとって、日本人の話を聞くことは、迷惑な話なのです。力になれずにごめんなさいね」

話し合うことすらできない。これがアメリカと日本に横たわる危機の本質だった。対話できないのだとしたら、どうやってお互いのことを理解すればいいのか。これこそが悲劇ではないのか。

38

朝は、ローランド・モーリス氏を訪ねた。

氏は、1917年（大正6）から1920年まで駐日大使を務めた人物だった。それだけでなく、「日米協会」の名誉会長だった。

日米協会は1917年、両国間の友好関係を強固なものにしようと、有識者の呼びかけによって立ち上がった団体だった。初代会長は、大日本帝国憲法の起草に関わった金子堅太郎、名誉副会長には、ワシントン軍縮会議全権大使でもあり徳川宗家16代当主の徳川家達、「日本資本主義の父」こと実業家の渋沢栄一、ダルマ宰相と呼ばれた政治家の高橋是清など、執行委員には新渡戸稲造、三井財閥の総帥・団琢磨、日本銀行総裁や大蔵大臣を歴任した井上準之助らが名を連ねた。

モーリス氏は朝を歓待した。

「ミス松岡、お会いできてたいへん嬉しいです。あなたの心の内をすべてお聞かせください」

朝はできるだけ明瞭に、中国に対する日本の見解について意見を述べた。そしてまた、いくつかの日本に関する誤解を解くべく、個人的な考えを述べた。

モーリス氏は大きく頷いた。

「現在の日米の危機的な状況——これは日本のせいだけではありません。1924年に施行された排日移民法は大きな間違いでした。私たちはこの法律によって、友人である日本人を閉め出してしまった。今のドイツの状況もそうでしょう。第一次大戦後のヴェルサイユ会議でドイツを追い込んだことが、今のヒトラーに繋がっている。ひとつの不公平さ、ひとつの過ちが、また別の事例を引き起こすのです」

「もし、あの移民法案が議会を通過しなかったら、日本人の中のアメリカに対する感情的なしこりが、少なくとも、まったく違うものになっていたかもしれないと私も思います」

朝もモーリス氏に同意した。

「ここにいる日米協会の間人は、あの法案に賛成してはいません」とモーリス氏が続けた。

「もし、日本の誇りを救済するためだけなら、その法律を無効にするべきです。私たちの良心もそう

言っています。しかし戦争は実に不快なものです。この日中戦争はただちに停止すべきです。私はこの件について、たいへん心を痛めてきました。日本は私たちアメリカ人の心理を理解していませんね。なぜ日本は、自分たちの見解を説明するために、努力をしないのでしょうか」

正しいことをしているのだから説明する必要がない。

これは多くの日本人の態度だろうと朝は思った。だから言うべきことを言わないし、ことさらアピールすることもない。だがこれでは、相手に理解されることはない。「正しい」というのはあくまで一方から見た見方で、逆側から見れば、それは「正しくない」と受け取られることもあるのだ。文化の違いで片付けてはいけないのだ。

朝が考えるに、言葉の問題もあった。英語が達者でないことも手伝って、日本人は欧米人の前では、ことさら無口なのだ。だが意思表示をしない欧米人は稀だ。無口は、「陰険な沈黙」に映る。

朝は、モーリス氏に感謝した。彼は間違いなく、日本の真の友人であった。彼は日本を理解しようと真剣に努力していたし、それが非難であれ、賞賛であれ、朝に対し、自分の考えを率直に語ってくれたのだ。

モーリス氏は苦慮していた。日米協会自体が、斜陽だったのだ。日中戦争が泥沼化するのと反比例するように、日米協会の会員が目減りしているのだ。日本への非難だった。

朝は、日米協会の現会長、ヘンリー・タフト氏へ手紙を送った。氏の考えを聞きたかったのだ。ヘンリー・タフト氏は、アメリカでも名の知れた弁護士で、兄は、第27代米国大統領のウィリアム・タフト氏だ。

ヘンリー・タフト氏は丁寧な返事をくれ、朝をウォール・ストリートにある自分のオフィスに招待してくれた。

30階建てのビルにあったオフィスは、ホテルのスイートルームと見紛うほどだった。若い物腰の丁寧な秘書が、タフト氏の部屋へ朝をいざなった。テーブルの上には、豪華な赤いバラの花束と、スタッフからの誕生日祝いの贈り物が飾られていた。この日は、氏の79歳の誕生日だった。

タフト氏は最初から最後までフレンドリーだった。朝は、温かな笑顔と握手で迎えられた。まるで十年來の友人のような扱いだった。

「ミス松岡、私はあなたのことを昔から知っています」

タフト氏は、朝の恩師のリンゼイ教授の知己で、リンゼイ教授を通じて、朝が博士論文を執筆している間、経済的な援助をしてくれていた。朝は、そのお礼を兼ねて、博士論文を一冊、氏に手渡した。氏は、論文が政府刊行物として印刷されることがどれほどの荣誉か、朝に熱く語った。

しばらくしてヘンリー・タフト氏は、朝を促した。朝は、アメリカで流布されている日中戦争の誤った見解を正し、自分の意見を述べた。そして思い切ってぶつけた。

「例えば、あなたが日本人だったとしたら、どうやってアメリカ人を説得しようと思いますか。どうかアドバイスをください」

「たいへん良いご質問ですな」とタフト氏は真面目な顔つきになった。

「この問題について少々言いたいと思っていました。どうして日本は、私たちのところへ来て説明をしないのですか？ 新渡戸稲造博士のような方でしたら理想的だったでしょうが、しかしもう亡くなりました。日本にとってはたいへんな損失です。中国や、中国を支援するアメリカの団体は、アメリカで莫大な資金を投下して大規模な宣伝活動をしています。それに対し、日本は何もしていません」

タフト氏は自分の席へ戻った。

「ラジオをつけたら聞こえてくるのは、中国側のプロパガンダばかりです。しかし日本は沈黙したまま。なぜですか？

私は日本を訪れたことがあります。日本人は一歩下がって何も言いません。しかしアメリカ人は一歩前へ出て大きく声を上げるのです。黙り続けていては、アメリカの世論に影響を与えませんし、何

も変わりません。アメリカ人はアジアについては何も知らないかもしれませんが、しかし常に真実を知りたがっているのです。今、アメリカ世論を変えなければ、のちのちたいへんな事態になるでしょう。日本政府は、時間と資金を使い、自分たちも立場を明確にするための奮闘努力をすべきだと思いますよ」

朝は頷くしかなかった。そしてタフト氏に尋ねた。

「効果的にやるには、日本はどうすればよいのでしょうか」

「日本は、あなたのような、アメリカをよく知り、アメリカ人の友人を持つ人間をたくさん送り込むべきです。そして個人的な友人と率直な話をしなさい。それがたいへん重要なのです。例えば今日のように。あなたは私に会いに来てくれましたね。友人として私たちは気楽に、自由に話せました。それが大事なのです。

日米協会が今年は活動しないのは事実です。しかし今私は、はるばる 8000 マイルの道のりを、友人を訪ねてやってきた若いひとりの女性に会っています。日本をよく知るひとりのアメリカ人として、どうして日本のために活動せずにいられますでしょうか。あなたを助けて差し上げたいのです。同じく助力を惜しまないアメリカ人はたくさんいますよ」

アメリカ人の友情はまだ残っていた。そのことが朝を安心させた。

「この感情——友情はあなた方の大きな財産ですよ。日本はこれを失ってはいけない。強く、しっかりとつかんでおきなさい。あなたが友人に話をすれば、彼らはそのまた数人に話します。いいですか、それは小さな石を池に投げ込むようなものです。最初は小さな波紋に過ぎなくても、次第にどんどん広がって、やがて池全体を覆うようになるのです」

ルイス・ラペル氏は、朝に「ひとりの友人が、あなたに代わってあなたのメッセージを複数の知人に伝えてくれるでしょう」と言った。そしてまた、ヘンリー・タフト氏も同じことを口にしていく。

朝は強く決意した。

私は「小さな石」になろう。



昭和 14 年 11 月 20 日 (株)誠文堂新光社 発行

朝は、つてを頼っては、話をしにでかけた。どこへ行っても、同じ質問をぶつけられた。

「日本は中国で何をやっているのですか？」

朝の大学時代の友人のコルゲート夫人からも同じ質問を投げかけられた。

「あなたの国の政府は中国で何をしようとしているの？ そんなことをしていると、日本経済は活動不能になってしまうわ」

コルゲート夫人の夫は、ジェームズ・コルゲートとって、歯磨き粉や石鹸の製造販売で財をなしたウィリアム・コルゲートの息子だった。現在、ジェームズ・コルゲートはその会社を継いでいた。コルゲート夫妻はヴァーモント州のベニントンに広大な屋敷を持ち、財界にも地域にも影響力を持っていた。

朝は、日本の立場を必死に説明した。

「あなたの考えはわかったわ、朝。もし私にできることがあるなら遠慮はいらないから、言ってちょうだい。そしてできれば、またベニントンへ来てね」

朝は、コルゲート夫人の口添えで、ニューヨークのリバーサイド教会に赴いた。コロンビア大学の近くにある、白く美しい教会だ。

フランスの13世紀のゴシック様式の大聖堂をモデルにした教会で、白い尖塔が空に伸びていた。大富豪ジョン・ロックフェラーの息子によって建てられたこの教会は、人種、宗派を超えたインターナショナル教会で、1930年に最初の礼拝が行なわれた。のちに、公民権運動の指導者のキング牧師、ビル・クリントン第42代米国大統領、ダライ・ラマ、キューバのカストロ議長、ネルソン・マンデラ南アフリカ共和国第8代大統領と言った有名人たちがスピーチを行なった。

朝は、米国内でも有数の伝道者として知られるフォスディック牧師と面会した。多忙な牧師は、朝のために時間をさいてくれたのだ。

「あなたは、多分とても難しい時期にアメリカへおいでになりましたね」とフォスディック牧師は言った。

「わかっています。でも私はひとりの日本人として信念を持っています。自分の国のためにできることを、最大限の努力でやらなければならないと思っています。私は10年間、ここアメリカで教育を受けました。そしてここには心の広い友人がたくさんおります。アメリカで今、皆さんの感情を理解したいと思っています。そして日本の考えを聞きたいという方のお役に立ちたいのです」

「私は東洋に行ったことがあり、ある程度の事情を理解しています」とフォスディック牧師は言った。

「しかし、アメリカ人達は現在の日本に向かって良い感情を持っていません。私はあなたのアメリカ滞在が不快なものにならないければよいが……と案じています」

「いいえ。それどころか、私は今まで友人たち皆に歓迎されてきました。でも、今日お伺いしたのは、フォスディック牧師、あなたのお考えをお聞きしたいのです。この大きな教会の牧師として、アメリカの人々はどう考えているとお考えですか」

「確かにパナイ号事件は不運な出来事だったかもしれませんが」

パナイ号事件は、1937年12月に起きた事件だ。アメリカの警備船パナイ号を、日本海軍の航空隊が攻撃し、沈没させてしまったのである。日本側は、中国船舶と勘違いしたと釈明したが、真相は藪の中。アメリカでは故意の爆撃であるとの認識で、一気に反日感情が高まった。だが斎藤博駐米大使——朝を大使館でもてなしたあの斎藤大使が、ラジオ放送枠を買い取って、全米に謝罪放送を行なった。斎藤大使の尽力で最大の危機は回避されていた。

「太平洋はあまりにも広く、その向こうの国と事を構えることを、アメリカ人は良しとしないでしょう。しかしパナイ号事件のような出来事が、また起こらないとも限りません。もしそうなれば、アメリカ人は太平洋がどんなに広大なのか、忘れてしまうでしょう。」

私は、日本も中国も訪れたことがあります。友人も両国にたくさんいます。すべてを混乱させるような意見の相違は、やがて悲劇を生むかも知れません」

数週間して、朝はフォスディック牧師に呼び出された。

「物事は、さらにもっと悪いほうへ進んでいます。多くのアメリカ人宣教師たちが中国から戻ってきて、写真や映像を用いて、現地での経験をレポートしています。当然、彼ら宣教師たちは中国に対して同情的です。一般的に、人々は弱者に味方します、ご存知でしょうか？ 特にアメリカ人女性は、皆、中国に対して気の毒がっているのです」

フォスディック牧師は朝に、ある動きを教えてくれた。日本に対して、鉄などの原料を輸出しないという運動をするグループができたというのだ。

「この動きは合衆国全土に広がっていくでしょう。日本は将来、アメリカから何かを輸入することは難しくなります」

コロンビア大学のリンゼイ教授も同じ見解だった。

「新聞はもうすでに日本とドイツが手を結んだと報道しています。特にナチスのユダヤ人迫害に対してアメリカ人は懸念しています。なぜユダヤ人を迫害する国と、日本は手を結ぶのか、と。日本への禁輸運動はすでに広がっていて、私のところにも『運動に加わって欲しい』と依頼がありました。私は拒否しましたけどね」

朝にとって、フォスディック牧師やリンゼイ教授との会話は有益だった。アメリカ人が、アジアで起こっている真実を知らないのと同じように、日本人もまた、アメリカでどう思われているのか、どんな動きが起こっているのか、まったく知らされてないということだ。アメリカで日本への理解を深める努力をするだけでなく、日本人にも正しい情報を伝えていく必要があると、朝は思った。

40

あなたの考えをはっきりと述べよ。

朝がアメリカを行脚している間、アメリカ人から問われたことは、常にそのことだった。

例えばセイラム（マサチューセッツ州）を訪れた時のことだ。

セイラムは日本と馴染みの深い場所である。なぜならば、ここにエドワード・S・モース博士が住んでいたからである。モース博士は、かつて東京帝国大学で教鞭をとった動物学者で、日本では大森貝塚の発見者として知られる。モースの同僚だったのが、アーネスト・フェノロサだ。フェノロサは日本美術を世界に紹介した人として知られる。日本に「国宝」の概念を持ち込んだのは、このフェノロサだ。2人は共にセイラムに住んでいた。そしてその隣町に住んでいたのが、ジョージ・アダムス・リーランド博士だ。彼もまた、モースの友人で、学校体操教育を日本に広めた。アダムス夫妻は大の親日家で、ジャーナリストの石川欣一氏のアメリカの養父母ともいえる存在だった。欣一氏は、動物学者の石川千代松博士の息子で、千代松博士はモースの弟子にあたる。モースのエッセイ『日本その日その日』（東洋文庫）を翻訳したのは欣一氏である。

朝がアダムス夫人のもとを訪ねると、夫人は歓迎してくれた。

「あなたさえよければ、あなたを私たちの娘にしたいわ」

同時に夫妻は、「支那事変について、きちんとその背景を説明してください」と強く言ってきた。

「あなたに、私の友人を紹介しましょう。しかし彼らは、自分で物を考え、自分自身で態度を決めます。今、日本の立場をはっきりとさせることが、日本人のひとりとしてのあなたの義務ですよ」

日米協会のある会員は、朝にこんなエピソードを教えてくれた。

「日本政府の関係者が、アメリカで演説をしました。聴衆のひとりが質問しました。『日本は中国侵略についてどのように弁明するのですか?』と。その人は何と答えたと思います?

単にこう答えました。『侵略とはどういう意味ですか?』。あれは侵略じゃないと言いたかったのでしょうか。それとも問題をすり替えたのでしょうか。私にはわかりません。ただ、日本人がそう答えたことで、聴衆から攻撃されることはありませんでした。聴衆はただ、笑ったのです。そう、日本に呆れたのです。

日本政府の関係者は、アメリカ人のことを何もわかっていませんでした。その問題から逃げてはいけなかったのです。そこに理由があるというなら、その事情を自分の言葉で説明すべきなのです」

朝からみれば、この日本人の対応は、多くの日本人と重なる。だがそれではだめなのだ。相手に説明する際には、相手の文化への理解も必要なのだ。日本ではこの態度で許されても、アメリカでは通用しないのだ。

例えば日本人は、手のひらを下に向けて手招きをする。だが欧米人は違う。手のひらを上に向ける。同じ意味のボディランゲージにも関わらず、まったく逆の振る舞いになるのだ。

朝ははっきりと理解した。コミュニケーションとは、それぞれの文化を理解することなのだ。理解せずにコミュニケーションをとろうとすると、それは「勘違い」では済まなくなる。ゴールへ向かう道まで異なってしまうのだ。

41

1938年(昭和13)1月から始まった、朝の1年半にわたるアメリカ行脚は、終わりが近づいていた。

朝は、ニューヨークのマンハッタンにある「ラジオシティ・ミュージックホール」にいた。ここで開かれる「国際新教育会議」のためである。日本の新教育協会の代表としてアメリカに来ていた朝は、この国際会議に出席することが、大きな目的のひとつでもあった。

朝は当日、父・健一が出国前に特別に選んでくれた振り袖に身を包み、西陣織の花模様の帯を締めた。会場には数多のバラの花が飾られており、いい香りが充満していた。朝は、最前列の中央に座らされた。

来賓や役員の挨拶が続き、とうとう朝の順番になった。

朝はマイクに向かって懸命に話をした。朝は、ここにこうして立っていることに感激し、話している最中に涙がこぼれてきた。朝が話し終わると、聴衆は皆、拍手喝采してくれた。

会が終わると、皆が朝のもとに集まって来た。「着物に触らせてくれ」というのだ。

緞帳が降りたステージ上で、朝が皆に囲まれていると、アメリカ合衆国の三大ネットワークのひとつ、NBCの関係者が近づいてきた。「ラジオ番組に出演して欲しい」という依頼だった。朝はその申し出を受け、放送では、いろいろな関係者への感謝の言葉を述べた。

翌日、ホテルのロビーに友人が朝を尋ねて来た。手には新聞を持っている。そこには「国際新教育会議」での朝の記事が載っていた。

朝は、ニューヨークに滞在している日本の通信社の人から、早朝に電話をもらったことを思い出した。

「おめでとうございます! 松岡さん。あなたの写真がニューヨークタイムズの朝刊に載っていますよ。今年、アメリカのメジャー紙に日本人の写真が載ったのは、あなたが初めてですよ」

ニューヨークタイムズの報道は、ひとつの契機となった。

朝の行くところ、行くところに、記者とカメラマンが張り付くようになり、朝の講演は新聞記事と

なった。

朝はさまざまな会に顔を出した。求められれば、どんなテーマでも話をした。人気者になりつつあった朝は、どこへ行っても歓待を受け、会の終わりには握手を求められた。握手のしすぎで朝の手はしびれ、感覚をなくしてしまうこともたびたびあったが、それでも朝は、会に来てくれた人への感謝を忘れなかった。握手ができなければ、その代わり何度もお辞儀をした。

朝は「小さな石」になりたかった。

朝は自分の行動が波紋になると信じていた。未来を信じていた。

松岡朝物語(仮称) 第9回

第9回 兆候——日本でのひととき

文／角山祥道

42

松岡朝が、1938年(昭和13)1月から、アメリカに18カ月にわたり滞在していた間、日本はすでに戦時下とわかっていような様相を呈していた。

日本は中国での戦線を拡大すると同時に、満州への関与を強めていた。

1937年(昭和12)に、若手官僚の岸信介らが中心となって満州の「産業開発5カ年計画」を策定。この計画を元に、満蒙開拓団と称して、農村の集落を丸ごと移すことも行った。この当時、岸は周囲に、「満州国は私の描いた作品だ」と胸を張ったと言われている。実際、岸は戦後も満州政策を否定していない。

終戦時、満州には約195万人もの日本人がいたが、関東軍が彼らを見捨て、逃げ去ったことが戦後明らかになっている。無事に逃げ帰った日本人の中には、幼子を残さざるを得なかった親も多く、のちに「中国残留孤児」の問題として浮上することになるが、もちろん、当時の日本人の多くは、満州は夢の別天地だと信じ疑わなかった。少なくとも、日本政府はそう喧伝していた。

一方で、中国との戦争は、国民生活に確実に暗い影を落としていた。

4月には「国家総動員法」が交付され、人々の生活はすべて政府、軍部の管理下に置かれた。「灯火管制規則」も公布され、各家庭は覆い笠や黒塗りの電球に取り替えさせられた。中国軍の空襲を警戒してのことである。東京では、バスがガソリンでなく木炭で走り始めた。

「紀元二千六百年記念行事」と銘打って準備を進めてきた東京オリンピックだが、これもまた戦争のあおりを受ける。日中戦争により、鉄鋼などの資材調達が困難になってしまったのだ。軍は、軍人を選手として供出することにも異論を差し挟み、世論は徐々に、「五輪返上」へと傾く。そして1938年7月、開催権の返上を閣議で決定したのである。本当ならば1940年(昭和14)に開催されるはずだった東京オリンピックは、「幻」と終わったのである。

こうした戦争に向かって行く国の姿勢を、多くの国民は諸手を挙げて賛成した。

戦争を遂行するのに、物資が不足していると聞けば、「五輪返上やむなし」と首肯する。綿糸布、ガソリン……と次々に配給制とかわっていったが、声を挙げて批判する国民はいなかった。

日本婦人団体連盟は、「街頭の無駄を拾う」運動を実施。ゴミ箱の中身までチェックし、無駄がないか監視した。同連盟が、同じく物資不足を補うため、「白米食廃止懇談会」を開催したのもこの年である。それにあわせて、各自治体は次々と「白米禁止」を通達。政府は、「おかずが何品もあるの

は贅沢だ」とし、「一葉運動」を押し進めた。これにあわせ、「国策料理」と称し、おかず一品だけの定食を提供する大衆食堂も大阪に現れた。

非常時国民生活様式委員会は、衣・食・住・社交に渡る 200 余りの「戦時生活様式」の大綱を決定するが、その中身は、「帽子、上着、ネクタイ、手袋、襟巻、足袋、オーバー、二重回し、コート、羽織、ステッキなどの省略」(衣)、「栄養の少ない白米の禁止」(食)、「新築は見合わせる」(住)、「結婚は質素を旨とし祝儀の辞退、結納金の大幅減額を行い、参列者は近親と関係者だけに止める」(社交)といった、生活の細部にまで踏み込んだものだった。国民の多くはこうした指示に、唯々諾々というより、むしろ積極的に従った。同年に誕生した「隣組」によって、お互いの生活を監視し合ったのである。

そして 1939 年 (昭和 14)、街角には「贅沢は敵だ!」という看板が立ち始める。

厚生省は、「生めよ殖やせよ国のため」というスローガンを掲げる。

そんな中、松岡朝は日本に戻ってきたのである。

43

朝は太平洋上の船の上にあった。

デッキを歩いていると、乗客たちはヨーロッパに関する不安を口にしていた。独伊軍事同盟が成立するなど、ヨーロッパはいまにも弾けそうだった。軍神マルスの怒りが、ヨーロッパを覆い尽くそうとしていたのだ。

ふと朝はひとりの魅力的な夫人に目を留めた。

話かけてみると、陸軍軍人でフランス大使館付武官を務めていた土橋勇逸氏の夫人だった。自然と土橋武官とも会話をするようになった。

3 人でお茶を飲んでいると、土橋武官が切りだした。

「私はあなたがしばらくアメリカに滞在しておられたことを存じております。あちらはどうですか？あなたが何をお思いになり、何をお考えになったのか、私は興味があります」

「アメリカにおける日本への印象は、悪いというより、どんどん悪くなっています」

朝は一拍おくと土橋武官の目を見据えて答えた。

「私にはあちらに良い友人がおりますが、しかし本当に少数です。ほとんどの人たちは中国側の言説にしか耳を貸そうとしないのです。日本はずっと何も言わず、沈黙したままです。斎藤博駐米大使でさえ口を閉ざしたままです。アメリカに日本のことを理解してもらうために、自分に何ができるのか、日本が何をすべきなのか、ずっと考えています」

土橋武官はじっと黙っていた。

「わかりました。東京へ戻ってから、このことを上層部の人たちに進言してみましよう」

朝はしかし、その提案に対し期待をしなかった。

日本は変わってしまっているだろう。

アメリカから日本を見続けていた朝が、出した答えだった。

軍部はすでに、政府の上にあった。天皇陛下ご自身は、首尾一貫して戦争に反対しているということは、朝の耳にも入って来ていた。だが軍部は、天皇の名の元に、中国での戦局を拡大しつつあった。

「平和」という言葉はすでに、皆が望むものではなくなっている。

客船が東京湾に入る。

見たこともない大きな軍艦が、こちらに向かって進んでくる。

「武蔵だ!」

乗り合わせていた海軍の軍人、駐英大使館付武官が叫んだ。

双眼鏡をのぞき込み、ひとり興奮している。

「武蔵です。間違いなく武蔵です。あの世界最大の 46 センチ砲を見てください。あれなら 40 キロ先に行く軍艦も沈めることができます。戦艦武蔵は、われわれ日本人が、われわれ日本の軍人がつくったんですよ！」

44

朝は帰国してから、しばらく何も手につかなかった。精神的にも肉体的にも、朝は疲れ切っていた。疲れを取ろうにも、日本の現状がそれを許さないのだ。

米の値段は瞬く間に急騰し、食料統制は日に日に厳しくなっていた。抗議の声など挙げることはできない。もし不平不満を漏らし、それが人の耳に入ると、何かしらの処罰が待っていた。

野菜や日用品も不足した。日毎に商店の行列が長くなり、砂糖が真っ先に姿を消した。入場者不足と、軍の嫌がらせで、娯楽施設は次々と閉鎖していく。

新聞紙上には「戦死者」としてではなく、「行方不明者」として、多くの兵士の名が掲載された。軍は、新聞のすべてを検閲していたのだ。もちろんこの当時は、そんなことは知る由もなかった。

どこの町も、空襲に備えるため、隣組の小さな単位に分けられた。地域のすべての住民は空襲に備えた教練に駆り出された。はしご、バケツ……誰もが役割を分担させられた。小柄な女性も例外ではない。水の入った重いバケツを持って、必死にはしごをのぼった。

教練は本末転倒だった。重いバケツを持ってはしごをのぼるなど簡単なことではなく、少なくない人が、はしごから落下し、何人かは命を落とした。だが誰も逆らわない。軍の命令だからだ。

女性の中には、分隊に入れられ、薙刀の訓練を強いられる者も出てきた。敵をどうやって刺すか。どうやって殺すか。そのことを叩き込まれたのである。

分隊に入らない女性は、「千人針」を強いられた。

1メートルほどの白木綿に、赤い糸で1人ひと針ずつ縫って結び目をこしらえる。1000人の女性が縫うので「千人針」という。これを肌につけて戦争に赴けば、無事に返って来られると信じられていた。こういった俗信を信じざるを得ないほど、追い込まれていたともいえる。

女性たちにとっては、千人針は愛国精神を示す機会でもあった。軍隊が中国へ向けて出征するときは全員通りに出て見送り、戻ってくればまた全員通りに出て出迎えた。

朝にとって意外だったのは、彼女たちが嫌がっていないことだった。

多くの女性は、積極的に軍部に協力した。そして、「誰もが協力しなければならぬ」という空気を醸成していった。

元気な男たちは、中国に送られるか、軍需工場へ送られた。ケーキが店から消え、寿司屋へ魚が届かなくなり、レストランへの米が運ばれなくなってしまった。

しかし誰も不満を漏らさない。

「教育ニ關スル勅語」（教育勅語）にこうある。

〈一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ〉

万一危急の大事が起ったならば、大義に基づいて勇気をふるい一身を捧げて皇室国家の為につくせ。

「教育勅語」によって、天皇や国への忠誠がすべてであると教えられて育った人間にとって、まさにいまは、「万一危急の大事」だった。天皇のために命を賭して戦うべきときだった。

朝の目から見ると、日本人の大半は、日本を救うためには、中国を負かさなければならぬと心から信じていた。だから誰も不満を漏らさないのだ。そして兵士となって中国大陸で天皇陛下に命を捧

げ、残った人間は、灯火管制の真っ暗な闇の中で——サイレンが鳴っている時はろうそくさえも許されぬ中で、皆、黙って座っていたのである。

朝には、こうした日本人の心情が理解できているとは言い難かった。朝はあまりにも多くの国、多くの人を見ていた。そして日本が「正しい」と言い切れないことをわかっていた。

「これ以上戦争を続けたら悲劇だよ」

父・健一はつぶやいた。

45

年が明けて、朝はようやく本格的に動き始めた。

手始めに、東京から列車に乗って葉山に向かった。金子堅太郎伯爵に会うためだ。伯爵は、明治憲法の調査起草にあたった人物で、アメリカ留学経験もあった。米友協会会長や日米協会会長を歴任し、日本とアメリカの関係悪化を憂慮していた数少ない日本人のひとりである。1939年には、「日米同志会」を立ち上げ、会長に就任していた。

アメリカの共通の人脈から知己を得た朝は、遅ればせながら、金子伯爵に訪米の報告に伺ったのだ。朝は、温かく迎えてくれた伯爵に、NY タイムズ誌の切り抜き——風刺漫画を差し出した。



裕仁天皇(昭和天皇)が軍服を身につけ、片方の足は軍靴、そしてもう一方の足は蹠になっている。右手に持った軍刀で中国人の赤ん坊を突き刺している。

この風刺漫画は、現在の反日感情を何よりも雄弁に語っているように、朝には思えた。

「われわれの外交官たちはアメリカで一体何をしておるのだ！」

伯爵は真っ赤になって怒った。

「なぜNYタイムズ誌にこんなものが載るんだ？」

「残念ながら、アメリカで沈黙を守ることが、日本の方針なのでしょう」

朝は皮肉を込めながら答えた。

「うむ。だが、われわれの立場を説明せねばならないのは明白だ。それであるのに何もしておらんとは！ 中国はアメリカに莫大な資金を投じて、戦争で自分たちの側につくように説得しているのにも関わらず！」

伯爵は語気を強めた。

朝は、日米協会の現会長、ヘンリー・タフト氏の話を持ち出した。

「私が出会った日本をよく知るアメリカ人たち——たとえばヘンリー・タフト氏などは、日本人の立場を明確にするためには、日本はきちんと準備を整えた人たちをアメリカに送り込み、アメリカ人に対して丁寧に説明しなければならぬとおっしゃっていました。私もそう思います」

朝は伯爵とひとしきり、太平洋を挟んだ二国間の危機について、意見を交換し合った。

ひと息つくくと、伯爵は奥から包みを抱えてきた。

「明治天皇陛下から賜った金杯があるのだよ。新年の吉兆の印として陛下からの盃で一緒にお酒を飲もうではないか。それに、この春に私は、88歳になるのだ。そのお祝いも兼ねてどうだろうか」

金杯は、大中小と3つあり、3段に重ねてあった。朝はいちばん小さな盃を選ぶと、金子伯爵と一緒にお酒を飲み干した。

朝は家に戻ると、父・健一にその日のことを報告した。

健一はさもありませんと頷いた。

「金子伯爵のような偉大な政治家は、もういなくなってしまった。あの人たちは現在よりも、ずっとうまく問題をおさめることができていたよ。今ではもうその人たちの跡を継げるような、そんな政治家はいない。政治家よりも軍部の力のほうがはるかに強力になってしまった」

46

帰国の船上で朝と会話した陸軍の土橋勇逸氏は、朝の想像に反して、その時の発言をしっかりと記憶していた。帰国してすぐに陸軍少将に昇進し、さらに参謀本部付となっていた。

土橋少将は、参謀本部から朝に電話をかけて来たのだ。

「あなたがアメリカで経験なされたことについて、参謀本部で少々話をしていただけませんか」

朝は突然の申し出に押し黙った。土橋少将は続けた。

「それが、ここにいる軍部の人間たちにとって、状況をはっきりと知る機会になると思います。あなたはお嫌かもしれませんが、私どもにとってたいへん大きな助けとなります」

電話を切ると、朝は父に相談した。

「私は何をすればいいの？ 土橋少将と奥さまは、船で私にとっても気持ちよく接して下さったんです。でも……」

「朝、これは、アメリカでの状況を軍部の指導者たちが理解するいい機会だ。きっととても実りがあると思うよ。あの人たちは本当に何も知らないのだから。だから朝、あなたが行って、知っている真実をすべて話してきなさい」

父・健一に背中を押され、朝は参謀本部を訪れることにした。

しかし一般の日本人にとって、参謀本部は恐ろしい場所だった。朝とて例外ではない。約束の時間が近づくと、朝は怖じ気づいた。

健一が朝の肩に手を乗せた。

「勇気を持ちなさい。日本にとって至極良いことなのだから」

朝は震えながらこわごわと参謀本部へと赴いた。土橋少将は私を見つけると、がっしりとした丸いテーブルのある部屋へ連れて行った。

そのテーブルを、参謀本部の首脳たちが囲んでいる。朝が入って来たというのに、誰も言葉を発しない。

ほどなくして、全員が直立不動となった。

朝が振り返ると、秩父宮雍仁親王が部屋に入ってくるころだった。雍仁親王——昭和天皇の弟宮である。

殿下は、朝を見るなり、丁寧に会釈をした。朝も慌ててお辞儀をすると、すぐさま土橋少将が朝を皆に紹介した。

「こちらがミス・松岡です。アメリカからの帰途、船上で偶然お目にかかった方で、ミス・松岡は私に、アメリカ合衆国での一般の人々の意見について、興味深いお考えをお話くださったのです。彼女のご自分の意思でアメリカへ行かれ、アメリカの友人たちに話をし、国中のあちらこちらを回られ、18ヵ月もの間滞在されました。今日はお話を伺うたいへん幸運な機会だと思います」

朝は事前に準備していたものを、やや緊張しながら読み上げた。

中国において日本がとっている政策に対して、アメリカの知識階級がいかに批判的であるか。反日のデモンストレーションや日本製品ボイコットはどういう状況なのか。

参謀本部の人間は、金子伯爵にも見せた例の風刺漫画を回覧した。アメリカ人の雰囲気について、さまざまな方面からたくさんの質問が出始めた。秩父宮殿下は厳しい表情を崩さぬまま、朝の話や質疑応答を聞いていたが、最後にひと言だけ言葉をはさんだ。

「このまま大きな事件にならなければよいのだが……」

それだけ言うと、殿下は真っ先に立ち上がり、朝に一礼した。そして軍隊式に敬礼をしてから、部屋をあとにした。

朝にとって、参謀本部の人間からの質問は、虚を突くものばかりだった。

なぜなら、彼らは危機感を抱いていなかったのだ。自分たちの中国での行動が、アメリカのみならず、世界中を怒らせていることに、無自覚だった。そして、自分たちの選択が戦争を拡大していると考えていない人すらいるのだ。

日本の軍人は、軍人の言葉を用いて、軍人の頭で考える。

そしてそれは、世間一般の人々との思いと、大きく乖離している。

朝ははっきり悟った。

実際に戦う兵士たちもまた、戦争を望んでいるものなどいまい。たとえ、戦場での死は名誉であると信じられていたにしても。

だがすでに日本には戦争に突き進まんとする政治家もいないかわりに、戦争を止める政治家もいない。政界と軍部とは渾然一体となり、誰が国を動かしているのかもはやわからない。

帰りの道すがら、朝の中で、秩父宮殿下の心配する声が、大きくなっていった。このまま、日本が中国との戦争を拡大していけば、たいへんなことになる。

家に戻り、父・健一の顔を見つけると、朝は開口一番、言葉をぶつけた。

「私、中国へ行きたい。中国で何が起きているのかを見たい」

健一はしばらく黙考すると、静かに言った。

「いい考えだと思うよ、朝。中国をこの目で見てきなさい。中国でのアメリカ人の立場を徹底的に調査してきなさい」

中国に行こう。この目で見よう。
朝は決意した。

(つづく)

1938年から18か月程、日本文化(主に正倉院の御物)や日本の立場について全米を講演してまわった。3ヶ月で150回の講演を行ったこともある。右のニューオーリンズの写真のように、全米各地で新聞にも取り上げられた。



会費納入のお願い

年会費納入をお願いいたします。子ども達に、より良い日本を残すための当会の活動内容は現在まで高く評価されて参りました。これも皆さまのご理解があればこそでございます。引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。

日本にあるものはオーストラリアには無く、オーストラリアにあるものは日本には無いと言われており、友好を深め、相互協力を推進することが重要な意味を持つ関係にあります。日豪両国の芸術専攻生の教育交流の発展や、オーストラリアやニュージーランドに寄贈した日本画の里帰り展の実現を通して、相互協力関係の深化を図りたいと思いますので、是非ご支援ください。

郵便振替 00130-2-366249 一般社団法人 海外と文化を交流する会
銀行振込 三菱東京UFJ銀行 渋谷支店(普) 0026193 海外と文化を交流する会
会費 10,000円(正会員) 5,000円(特別賛助会員) 3,000円(学生会員)

海外と文化を交流する会事務局
〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-27-6 パインビル内
TEL&FAX 03-3370-7654 e-mail: official@kaigai-bunka.org
<http://www.kaigai-bunka.org>